

た ($p = 0.063$). Dukes C の 5YDRS は差がなかった。

【結語】側方郭清は手術時間が長く、術後合併症が多い。遠隔成績で明らかな有効性は認められなかったが、Dukes B 症例で郭清効果が期待できる可能性がある。

5 潰瘍性大腸炎に対する LCAP と GCAP の治療効果の比較検討

渡辺 和彦・池田 晴夫・岩本 靖彦
相場 恒男・米山 靖・古川 浩一
和栗 暢生・五十嵐健太郎・月岡 恵
新潟市民病院消化器科

2002年7月から2004年11月までに当科で施行されたLCAP, GCAPを対象に, CAI値の推移による治療効果, 有効性を検討した。患者数は18例, 11例(計14回)がLCAP, 7例(計7回)がGCAPを施行された。結果はLCAP 14回中11回で効果を認め(78.6%), GCAP 7回中3回で効果を認めた(42.9%)。若干LCAPが有効な印象であった。LCAPでは開始約2週後, GCAPでは約3週後に効果が認められる傾向であった。中等症に限ると両者とも効果が期待でき, 重症や下掘れ潰瘍合併例では効果はやや乏しかった。再燃した症例は, 両者とも8ヶ月以内に再燃した。緩解維持目的のアザチオプリンを併用しない群では全例再燃した。更なる症例の蓄積と長期の経過観察が両者の比較検討には必要である。

6 難治性潰瘍性大腸炎に対するタクロリムス使用の試み

津端 俊介・杉村 一仁・本間 照
小林 正明・田崎 麻子・成澤林太郎
青柳 豊
新潟大学医歯学総合病院第三内科

ステロイド抵抗性の難治性潰瘍性大腸炎患者4名の緩解導入・緩解維持治療に, タクロリムスを用いる機会があったので報告する。

いずれの症例も頻回の再燃を示し, ステロイ

ド・LCAPに対する治療反応性が低下していた。寛解導入目的に用いた時, 3例で有効であったが, 効果発現までに少なくとも1週間を要した。随伴症状としては, 手指・指の振戦を3例に, 耐糖能異常を2例に, 尿蛋白を1例に認めた。感染症の発症や増悪は認めなかった。一方, 緩解維持目的に用いたとき, 投与量の減量に伴って再燃した症例を経験した。このことは, 緩解維持に対するタクロリムスの有効性を示唆するものと考えた。以上より, タクロリムスは今後の難治性潰瘍性大腸炎の緩解導入・維持療法に対し, 有効な薬剤である可能性が示唆された。今後の課題として, 症例の選択や, 再燃防止のための投与期間, 癌や催奇形性などの問題に関して, 症例を積み重ねる必要があると考えた。

7 炎症性腸疾患に対する6-MPの有効性について

石本 結子・本間 照・松澤 純*
杉村 一仁・小林 正明・佐藤 俊大
小林久里子・五十川正人・窪田 智之
青柳 豊
新潟大学医歯学総合病院第三内科
県立坂町病院*

8 クロウン病に対するレミケード治療の経験

月岡 恵・池田 晴夫・岩本 靖彦
渡辺 和彦・相場 恒男・米山 靖
古川 浩一・和栗 暢生・五十嵐健太郎
新潟市民病院消化器科

炎症性サイトカインTNF α に対するモノクローナル抗体, infliximab(商品名レミケード)の使用経験について報告した。炎症性クローンに対する単回投与(4例7回)では, 1週後に炎症の著明な改善を認めたが, 8~12週後には投与前のレベルまで増悪した。8週間隔の維持療法を行った2例では, 1例が投与3回目頃からCRPのコントロールをみたが, 1例は無効であった。クローン病の胃・食道病変に対して投与した例では, 8